

「マリアの賛歌」井上隆晶牧師

ルカによる福音書 1 章 26～38 節、ルカによる福音書 1 章 46～55 節

①【処女降誕とは】

マリアのところに大天使ガブリエルが来ていました。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名づけなさい。」(31 節) 有名な「受胎告知」です。マリアはヨセフと婚約していましたが、まだヨセフの家に入っていないので「どうしてそのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」というと、ガブリエルは「聖霊があなたに降り、いと高き方（神）の力があなたを包む。だから生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。親類のエリサベトも、年を取っているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。」(1: 35～37) と説明します。その時のマリアは 15 歳くらいだったといえます。不妊の女であった高齢のエリサベトが身ごもったという話は、彼女に勇気を与えたことでしょう。先輩の信者が献身する姿は、周りの若い信者を励ますことになるのです。処女が子供を宿すことをどう解釈すればいいのでしょうか。トマス・ホプコ神父はこう書いています。

●神のみが、世を救うことができます。人間だけではできません。なぜなら、救われる必要があるのは人間自身だからです。…処女よりの誕生は、決して処女性を偶像化した結果でもなく、性を汚れたものと考えからでもなく、イエス様の道徳的な教えに箔をつけるためでもありません。処女よりの誕生は、生まれて来た方は、救いを必要とする他のすべての人間と同じような単なる人間であるはずがないということなのです。…世を救うためにきた救世主は「この世のもの」であるはずがありません。

私はあまり処女が身ごもることに驚きません。万物を創造したのは神です。神は天地創造のとき、処女地である大地から塵を取り、聖霊を吹き込んで最初の人間を創造しましたが、世の終わりに、マリアという処女地を用いて肉を取り、聖霊によって新しい人間を創造したのです。人間は救いを必要としており、一方神は、人と共に生き、死ぬための体を必要としていました。マリアがそのための体を提供したのです。彼女の中で神と人が初めて一体になり、神性を失うことなく人となり、まったく新しい存在である神人イエス・キリストが生まれました。私はこれを思うたびに驚きと深い感動を覚えます。考えられない創造が行われたのです。神と人は永遠の結婚をされたのです。これから永遠にイエス様はこの受け取った人間性を脱ぐことはありません。神は今こうして人間と運命を共にされるのです。「二人は一体となる」はこうして完全に成就したのです。

②【お言葉どおりこの身になりますように】

マリアは「わたしは主のはしめです。お言葉どおりこの身になりますように」(38節)と言いました。これほど美しい人間の献身の言葉は聞いたことがありません。神様は救いの業を行うにあたってマリアの同意を求められました。神の救いは、「神の働きかけ」と「人間の自由意志による応答」という共同作業によって成就します。マリアの受胎は私たちの雛形です。昔マリアの同意によって胎内にキリストが宿りましたが、今は私たちの同意によって、私たちの中にキリストが生まれるのです。昔マリアの肉がキリストになりましたが、今私たちの肉がキリストになるのです。昔キリストはあなたの外で働きましたが、今はあなたと共に働くのです。

この「お言葉どおりこの身になりますように」という言葉は、私たちがふだん祈っている主の祈りの中の「御心が天で行われるとおりに、地でも行われますように」という祈りと同じです。私の上に神様の御心を行ってくださいと祈っているのです。私たちは日々、そんなすごい「献身の祈り」を唱えているのです。

●渡辺和子シスターがこんなことを書いています。「修道誓願と言うのは白紙の一番下に署名をするようなものです。これから先この白紙の上の部分に何を書かれてもかまいませんというもののなのです。」

神が私たちを呼ばれるのは、私たちの助けがなければ救いを成し遂げられないからではありません。神の救いを見させ、私たちをその証人にするため、また私たちに栄光を与えるためです。クリスチャンになるというのは栄光ある仕事に呼び出されたということなのです。

③【わたしの魂は主を崇める】

マリアは親戚のエリサベトを訪問し、賛歌を歌いました。「わたしの魂は主を崇め、私の霊は救い主である神を喜びたたえます。力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」(47～48節) この「崇める」をラテン語で「マグニフィカート」といい、「大きくする」という意味です。それゆえこの賛歌は「私の魂は主を大きくしています」という意味になります。私の中で自分というものが小さくなってゆき、神様が大きくなっていくということです。自分がしたことがちっぽけに見えてきて、神様がして下さったことが大きく見えてくる、だから嬉しくなって神様をほめたたえたいくなるのです。マリアは「身分の低い、この主のはしめにも目を留めてくださったからです。」(48節)と言いました。生まれた赤ちゃんは母親の黒い目を追いかけます。それによって自分が見られている存在だということを知って安心するのです。マリアも自分が神に覚えられ、愛されているという視線を感じたのです。エリサベトはマリアに「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、何と幸いですでしょう。」(ルカ 1:45)と言いましたが、肉親であることが幸いなのではなくて、信仰があることが本当に幸いなのです。

●この後、母マリアとイエス様の兄弟たちは故郷のナザレを離れてイエス様の巡回伝道と一緒に加わっていますから、イエス様の弟子になったことが分かります。

聖霊降臨の時も、弟子たちの中に母マリアと兄弟たちはいました。またイエス様の兄弟ヤコブがエルサレム教会の監督になると、母マリアも教会の中心にいて教会形成の重要な働きを担ったと思われます。伝承では紀元 70 年のユダヤ戦争を避けて使徒ヨハネと共にエフェソに移住し、晩年をエフェソで過ごし、そこで死んだようです。しかし福音書を読んでいて非常に不思議に思うのは、その後のマリアの話がほとんど出てこないことです。ペトロやパウロがマリアに会いに行ったとか出てきません。救い主のお母様ですから特別扱いをされてもよいのに、全然そのような話が出てこないのです。マリアのすごさは最初の謙虚さを生涯失わなかったということだと思います。

正教会ではキリストを産んだ女として「生神女」(テオトコス) という称号をマリアに与え尊敬しました。しかしイコンに描く時もマリアだけで描いてはならず、キリストと共に描かなければならないと定めています。それはキリストから離れて栄光はないからです。マリアのすばらしさは、神の道具になったということです。

●NHK 大河ドラマで新島八重の生涯が放送されましたが、同じ会津藩の女性で、井深八重 (いぶか やえ) という人がいました。彼女は、同志社女学校 (現在の同志社女子大) を卒業し、長崎で英語教師をしていましたが 22 歳の夏、ハンセン病と疑われ神山復生病院へ隔離入院させられました。籍も抜かれすべてを失った絶望から何度も自殺を考えたといえます。神山復生病院は、レゼー神父を院長とする病院でしたが、医者は神父だけで看護師もおらず、比較的軽い患者が重い患者の世話をしていました。入院から一年が経った頃、彼女の症状は悪化しないばかりか、きれいな肌になっていました。そこで診察を受けたところ、ハンセン病ではなく一時的な皮膚病だった事が分かりました。レゼー神父は「あなたが、ハンセン病でないということがわかった以上、あなたをここにおく理由がなくなりました。どうぞ今後の事は良く考えて、自分の人生を生きて行って下さい。」と告げると、八重は「私は資格をとり、この病院の看護師になります」といって看護師となりました。当時ハンセン病に対する差別と偏見が強かった時代なのに婦長として献身的な看護にあたり、生涯をハンセン病患者の救済に捧げました。自分が誤診を受けたことについて、彼女は「自分がここにいることは恵みです。神様からこの場を与えられたことを感謝しています。」と語りました。井深八重が座右の銘としていた聖書の言葉は「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが、死ねば、多くの果を結ぶ」(ヨハネ 12 : 24) でした。彼女は 91 歳で天に召され、その墓には「一粒の麦」と刻まれました。

献身とは、自分に死ぬことなのです。自分の人生や命を自分で生きようとせず、神に委ねきって、神によって生かしていただくことなのです。謙虚な美しい人間の姿がここにあります。マリアの美しさはこの完全な献身にあります。私たちも「お言葉どおりこの身になりますように」と祈りたいと思います。